

天下の惨状と救済

『立正安国論』 (文永元年・建治弘安の交り)

(本文)

旅客来りて嘆《歎》いて曰く、近年より近日に至るまで、天変・地天・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、すでに大半に超え、これを悲しまざるの族、あえて一人もなし。

(現代語訳)

旅人が来て嘆いていうには、近年(正嘉元年・一二五七)より、今年(文応元年・一二六〇)にいたる四箇年の間に、大地震や大風などの天変地異が続き、飢饉が起こり、疫病が流行して、災難が天下に満ち、広く地上にはびこっている。そのために牛や馬はいたるところで死んでおり、骸骨は路上に散乱して目もあてられず、すでに大半の人びとが死に絶えて、この悲惨な状態を悲しまない者は一人もいないという。

(本文)

汝早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰せよ。しかればすなわち三界は皆仏国なり。仏国それ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微なく、土は破壊なくんば、身はこれ安全にして、心はこれ禅定ならん。この詞、この言《この言、この詞》、信すべく崇むべし。

(現代語訳)

あなたは一刻も早く信仰の矛先をあらためて、ただちに真実の教えである法華経に帰依しなければならぬ。そうすることにより、この世界はそのまま仏の国となるであろう。仏の国は決して衰えることはなく、また十方の世界はそのまま、浄土となるであろう。浄土は決して破壊されることはない。国が衰えることなく、世界が破壊されなければ、わが身は安全であり、心は平和であることは必然である。この言葉は真実であり、信じなければならぬ、また崇めなければならぬのである。